

---

# 召喚系！

夜行一儀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

召喚系！

### 【Nコード】

N6625L

### 【作者名】

夜行一儀

### 【あらすじ】

赤星 銘は、五月までの臨時委員長。

悪評高い留年生・篠座に巻き込まれ、亡国の危機にある異世界に飛ばされた銘は、彼が『千の伝説を持つ男』だと知らされ全力空振り元気少女と、世界を救い飽きた毒舌勇者が送る、“本格”異世界召喚物語。

## プロローグ

雨上がりの道路を、幾つかの玉葱が転がっていく。  
しっとり黒ずんだアスファルトの上を、競うようにして。

海に面した絶壁をなぞるような二車線道路。道は狭く、急勾配、急カーブの続く難所だ。神社前のバス停付近は、まだしも坂は穏やかなのだが、野菜たちのレースは終わろうとしない。

その一つが、左手に進路を変えた。転々と踊り、道路を渡る。

音もなく眼下の海に消えた玉葱を見て、幼い少女は泣き出した。

小さな手は、道路の縁にかろうじてぶら下がる母親の指を握っていた。

ガードレールを設置するよう投書の続く場所だった。水たまりを避け、道の内側を歩いていた母子は、非常識な速度でカーブを降りてきたトラックに気付くのが遅れた。撥ねられこそしなかったが、転倒した母親は断崖に身を落とし、間一髪で縁に捕まった。トラックは母子を残し、行ってしまった。

「ママ……ママア……!!」

懸命に自分を引き上げようとする愛娘を見上げ、母は力なく笑う。娘はこの春から小学生になる。山上に住む祖父に見せるため、わざわざ着てきた制服はすっかり泥だらけだ。それでも咄嗟にかばい、怪我をさせなかったのは母として最後の矜持だった。さもなくば、こんなに落ち着いた気持ちではいられなかっただろう。

「……いい子だから、泣かないの」

だからこそ、わかる。

自力で這い登るのは無理。助けも期待できない。一時間に一台、

車が通るか通らないかの田舎道だ。

指はすでに痺れ、感覚が消えていた。触れた愛娘の温もりさえも。

「メイ……お願い。救急車を呼んで来て」

「えっ？」

まっすぐ自分を見上げる母親の言葉に、少女は驚いた。

「バス停の公衆電話……かけ方わかる……でしょ？」

「わかる……けど……でも……でも……」

「ママは大丈夫だから……急いで」

母の笑顔に後押しされ、少女は立ち上がった。

「車に気をつけてね」

「うん！」

駆け出した背中を見送り、母親は目を閉じた。

睨<sup>まなこ</sup>に写る最後の像が愛娘であることを確かめ 手を離れた。

## 第一話 委員長（仮）

赤星<sup>あかほし</sup> 銘<sup>めい</sup>が委員長に選ばれたことに、特別な理由はなかった。

成績は中の下、運動神経そこそこ。十人並みの容姿にやや小柄な背丈。この春、入学したばかりのごく平凡な女子高生。客観的に見ても、委員長に選ばれる要素は無いと思う。

そもそもの話、銘は委員長になりたかったわけではない。

銘の通う公立校では、新学期の始めに担任が暫定の委員長を決める。本来は生徒がクラスに馴染んだ五月頃、他の委員とともに立候補か推薦の上で選ぶのを慣例とする。しかし、春はとかく多忙な季節だ。教師にすれば、とりあえずであれ、雑務を任せられる生徒代表が欲しい。

出席番号に忠実な席順の結果、最前列で担任を見上げる従順そうな少女に指名がかかったのは不思議な話ではなかった。当惑する本人を除けば、であるが。

「……の割りには、よくやってると思うけど」

弁当箱を挟んだ親友は、サンドイッチを片手に、そう言った。

一年A組、昼休みの教室。好きな席に群がり歓談に興じる様子は、さながら蜂の巣を覗いたようだ。

「そ、そうかなあ？」

「毎日、学校のどっかで走り回ってる感じ。暫定委員長って本番よりキツイんじゃない？ 一人しかいないから、他の委員の仕事まで全部回ってくるしさ」

「忙しいのは要領悪いからだよ。周りに迷惑かけてばっかだし」

「最初は誰でもそんなもんだって」

「元・カリスマ委員長でも？」

「そりゃそうよ。あ、その呼び方は以後禁止。私の黒歴史なんだから」

「ええつ、そうなの？ カッコよかったのに、彩子の委員長」

「今年は、絶対やんない」

「ええ〜〜？」

銘は目を丸くした。取り落とした玉子焼きを追うことも忘れた。

しのめ 東雲 彩子は中学以来の親友で、同じクラスもこれで三度目だ。

全国模試でも五指に入る才媛の上、深層の令嬢という趣の物憂げな美貌。シルクと見まがうストレートの長髪は、パーマを当てにいった美容院に泣いて止められたという伝説がある。

そんな彩子の委員長は一際、鮮やかだった。貴族然とした容姿から想像もつかない苛烈な舌鋒は、運動部の荒くれからセクハラ教師まで容赦なかった。その勇姿は、令嬢のイメージを王子のそれに書き換え、男子を嘆かせた以上に女子を喜ばせた。実際、華奢な外見と裏腹に、彩子は姉御肌で気風がよかった。凜々しい横顔に憧れる者は絶えず、カリスマ委員長の名声は学校全体に広まった。当人が固辞しなければ、生徒会の長となることも容易かつたはずだ。

銘は、だから当然、彩子が委員長になると思っていた。

「私、今年の目標は『怠惰』に決めたの。今年一杯は恋愛も勉強も、努力せず適当に流すつもり」

「それって、ナマケモノ宣言？」

「ただ怠けるわけじゃないのよ。努力なしでどれだけ今の立場をキープ出来るか、それを確かめたいの。成績が落ちたなら、来年取り戻せばいいんだし」

「うわー、やれば出来る人のセリフじゃない？ それ」

「フフ……銘も一緒にする？」

「無理！ 絶対、無理だから！」

「じゃ、そういうことで、本番の委員長もよろしくね」

「あはは……プレッシャー感じますなあ」

床に手を伸ばし、落とした玉子焼きを拾う銘。

その微妙な表情に気付き、彩子は柳眉を寄せた。

「……もしかして、なりたくない？」

「え？ そ、そういうわけじゃないケド……」

「もう一度、剣道始めたいとか？」

「ないない。ワタシの剣道は中学で終わり」

「ふうん……私は銘を推薦するけどなあ」

「……」

「委員長なんて名前ばっか偉くて、実態はただの雑用係じゃない。

クラス中の面倒押し付けられて腐る人もいるわ。ただの格好つけや、内申書目当ての子はたいていそう。でも、銘は違うわ。不器用だけど一生懸命やってる。傍で見れば、わかるもの」

「……ありがとう」

「向いてると思うけどなあ 銘は」

「あ、あははは……彩子に言われると照れマスなあ」

澱みかけた空気を散らすように、銘は両手を振ってみせた。

「心配しなくても、別に委員長になりたくないってわけじゃないし。選ばれたら喜んでなっちゃうし！ とりあえず今は全力で頑張るから。困ったことがあったら何でも言ってきて、彩子」

早口でまくしたてる銘を、訝しげに見つめる彩子。

「……本当に？」

「ホントにホントに」

仕方がない、という様子で緊張を解いた親友は、代わりに悪戯っぽく片目を閉じた。

「それじゃ早速、委員長さんに無理難題を聞いてもらおうかな」

「……え、ホントに？」

「ホントにホントに」

「……彩子、ちょっと怒ってない？」

さあね、と微笑を浮かべてから、話は本題に移った。

「昨日、クラスのコから苦情が回って来たの。自分達じゃ手に負え

ないから、委員長に伝えて欲しいって」

「手に負えないって、誰が？」

銘は首をかしげた。銘の知る限り、いわゆる不良はこのクラスにはいない。

すぐには答えず、彩子は視線を移動させた。

教室の最後列、廊下側の席。その留守を確認してから、口を開いた。

「銘 篠座 将為って、知ってる？」

## 第二話 留年生

篠座 将為。

どこか響きのよいその名は、銘の記憶にも存在した。

「うん……知ってる。や、名前だけかな？ 廊下側一番後ろの人だよね？ 色白で、確か眼鏡の……」

「そう、そいつよ。出席番号六番、身長百七十五くらい。やたら目つきの悪い紅眼鏡」

「眼鏡の色まで覚えてないよう。滅多に見ない人だし」

銘にとって篠座という名に結びつくイメージは、眼鏡の男子でなく、教室の隅に取り残された無人の席だった。教師から渡されるプリントを配るのは委員長である銘の仕事だが、そこに席の主人の姿は滅多にない。朝に見かけても、次の時限には消えていることがままある。サボリ癖があるのだろうか……何となく銘はそう思っていた。

「その篠座のサボりが、問題になってるのよ」

「んー。確かに、気にはなってたんだけど……」

小さな弁当箱をしまいながら、少女は言葉を濁す。

昨今の高校、とくに公立高では、不登校や無断欠席は珍しくない。解決を図るかどうかは担任の熱意次第。親しい友人でもなければ、生徒同士は不関知というのが一般的だ。

「ぶつちやけるとね、授業サボるのは構わないのよ。後で困るのは本人だし、私達が迷惑するでなし」

「あははは……まあね」

彩子の感覚がそうであるように。

けれど、銘のそれは、異なった。

サボりは結局本人のためにならないし、友人も出来ない。自分が関わることで級友が学校に向かうならどんなにいいだろうか。その

ためなら何でも出来ると思う。

クラス団結を旨とする教師や委員長が不良生徒を説得する展開は、昭和で絶滅した文化だが、銘には憧れがあった。時代劇好きの祖父、青春ドラマを愛する父、少年漫画を手放さない兄という男家族の影響かもしれない。

弁当箱を布巾に包み、鞆かばんにしまうと、銘は姿勢を正した。

「それじゃ、何が問題なの？」

「掃除よ　そ・う・じ・当・番」

銘たちの高校は生徒の自主性を重んじる。経費削減も兼ねて、毎日の校内清掃は生徒の手で行われる。クラスの男女十人ばかりが放課後に残り、交代で教室と廊下を掃除するのだが、篠座　将為は一度として、当番に応じたことがないそうだ。

「掃除のサボりくらいで大人げないって、最初は私も思ったけどね。問題は他の男子よ。篠座がサボるならオレもって調子で、一人消え二人消え……昨日はついに女子だけで掃除したんだって」

「うわあ……そりゃ怒るのも無理ないよ」

「よね。流石に我慢のゲンカイだから、まずは元凶の篠座を何とかして欲しいってことで、私に話が回ってきたってわけ……聞いている？」

「あ、ごめん。ちょっとボーツとしてた。ん〜、でもそれ、ワタシが言わなくても、みんなで言えば済むんじゃない？　サボらないで掃除してって」

「それが言えないから、委員長にパスが回るわけよ。虎の首に鈴をつける話だから」

「……猫じゃなくって？」

「猫じゃなくって」

大真面目に首肯し、「虎でも可愛いかも」と付け加えた。

「私が聞いた限りじゃ、篠座って名前は悪名で通ってるわ。この界限の不良入った連中なら、知らない　者はないってくらい」

「あ、影番みたいなの？」

「カゲバン？」

「影の大番長」

「銘……昭和が終わって、今年で何年になるか知ってる？」

「い、いいじゃない……好きなんだもん」

「ま、でも、一概にあんたを笑えないところがこの話の怖いところ  
なんだけどね。なんせ噂に寄れば、『学園の影の支配者』らしいか  
ら」

「……へっ？」

「他に『裏世界の殺し屋』とか、『暴力団の後取り息子』とか……」

「昭和でもそれはないと思う」

真顔で手のひらを左右に振る銘に、彩子も苦笑する。

「でもワタシ、そんな噂、聞いたことないよ？」

「銘は部活やってないからね。他のコは部活の先輩とか、上の兄弟  
に聞かされてるのよ」

そう言えば、彩子には二つ上の姉がいると聞いた。

「でも何で、上の人が篠座くんのこと知ってるワケ？」

「そりゃあ、篠座は留年してるからね」

知らなかったの？ という口調で彩子が説明する。

「あいつ、三回目の一年生なのよ。頭はいいらしいけど、出席日数  
が足りなかったらしくて。せっかくもらった追試もサボったらしい  
し」

「二年連続？」

「二年連続」

彩子の姉は、篠座と同じクラスだったという。ならば、その情報は  
少なくとも噂ではないはずだ。

銘は思わず唸った。自分が二度も留年したなら、学校に行きたく  
ないとは当然思うだろう。むしろ退学か、転校するのではないか。  
それでも卒業を望むなら、授業を真面目に出るしかない。

篠座の行動は矛盾するように銘には思われた。それともこの学校  
に残る必要性もあるのだろうか。まさか本当に、『学園の支配者』

だったりするのか。

「……でもま、謎の留年繰り返してただけだね？ 後は、ただの噂なんですよ？ なら、大丈夫じゃないの。喧嘩とかしそうにないし」

「喧嘩してるところを見た人はいないけど、消された人はいるのよ」  
「……消されたあ？」

「当事の上級生にタチの悪いのがいて、事あるごとに篠座に喧嘩売ってたのよ。それがあある日、篠座と揃って学校を休んで……それつきり、消息不明だった」

「……それも噂だよな？」

「残念だけど、お姉ちゃんから聞いた話なのよ」

「なななな、なにそれ！ フツーに警察沙汰じゃないの、それって？」

思わず立ち上がり声を上げた銘に、クラスの視線が集束する。真っ赤になった銘が落ち着くのを待ち、彩子は説明を続けた。

「目撃者も証拠もないから、事件にならなかったそうよ。偶然、同じ日に蒸発したってことになったって。まあ、どう考えても怪しいんだけど。」

私の知ってる篠座の話はこれで全部よ。どう……これでも行く？  
返す言葉のない銘に、親友の整った顔が真剣になった。

「銘……話を振った私が言うのも何だけど、この話は引き受けなくていいと思う。委員長の管轄を越えてるし、まして銘は仮委員長だし。先生に注意してもらおうようにしなよ。噂が本当なんて私も思わないけど、確かに篠座は普通じゃないわ。何かある感じなの。みんな、それを怖がってるのよ」

「……うん」

親友の眼差しには、心からの心配が感じられる。

「でも……だからこそ、委員長の出番だよな」

「銘！？」

「心配してくれてありがと、彩子。でも……」

担任の注意で解決するなら、彩子は自分で教師に言うだろう。そうでないことは銘にも予想できた。篠座のサボリや欠席について、担任教師が一字一句でも言及した覚えがないからだ。篠座・学園の支配者説は、あながち嘘ではないかもしれない。

今こそ、自分は必要とされているのだ。

彩子は、親友のスイッチを押してしまったことを痛感した。この娘の場合、中途半端な制止は逆効果なのだ。そしてこのギアが入った以上、銘は結果を出すまで止まらない。それが成功であれ失敗であれ、全力疾走、フルスイングだ。

「ああもう……じゃあ、私もついてくから。いいよね？」

「一人で行けるよ。彩子は今年、怠ける予定でしょ？ 大丈夫」

その目に炎を点したまま、銘は微笑む。

「これでも一応、委員長だからね」

昼休みの終わりを告げる鐘が、厳かに鳴り響いた。

### 第三話 黄昏の図書室

翌日の放課後。古びた図書室の前に、腕組みした少女の小さな背中があった。

問題児・篠座の姿は、しばしばここで見られるという。

「燃えてくるよね」

自分に言い聞かせるように、少女 銘はつぶやいた。

夕日の差し込む廊下に伸びる影は、銘のもの一つだけだ。「絶対ついていく」と譲らなかつた彩子の申し出を最後まで断り、銘は単身、学校の支配者と噂される男の根城を訪れたのだった。

親友の心配も無理はない。銘の高校には図書室が二つある。少子化によつて余つた一階の教室を改築した新図書室に対し、こちらは旧図書室と呼ばれている。需要の少ない専門書や児童書だけが残された、いわば分室だ。普段から人気はなく、司書も図書委員もいない。

いかにも不良が溜まりそうな場所なのだが、一匹狼の篠座が占拠して以来、寄り付く者は皆無という。彩子経由の情報で、どうやら外れていないことを、銘は今、肌で感じていた。

廊下に面した図書室の窓、すりガラスの向こうで人影が動く。

間違いない 篠座は、ここにいる。

銘は廊下の端に見つけた掃除用具入れをそつと開いた。箒を一本取り出し、両手で構える。三年続けた剣道は二段の腕前だ。手ごろな棒さえあれば、そこらの男に負けない自信があつた。体格から考えても、篠座が腕力を武器にするタイプとは思えない。

不意に、ポケットの携帯電話が震えた。

彩子からのメールだ。内容は簡潔だった 『無茶しないで』。

口の端が緩むも笑みにならない。銘は心の中で親友に謝った。  
……ごめんね彩子。ワタシ馬鹿だから、無茶くらいしないと、彩子みたいに上手くやれないんだ。

『まかせて！』と返事して、銘は大きく息を吸い込んだ。  
ドアノブを回し、勢いよく図書室に飛び込んだ。

黄昏の図書室は、紅海の水底のようだった。

無論、紅海の水が赤い事実などない。けれど、その名から想像される幻想的風景がそこにあった。板張りの床と書架しじまに囲まれた静寂に揺れる陽炎の緋色。並んだ机を跨ぎ、銘の足元に伸びる長い影。

その主は、正面の窓際に立っていた。

細身の若者だった。ブレザーの上着を脱いだシャツの白も、ここでは暖色の風味を帯びる。袖口から伸びた神経質そうな細い指。首周りも男にしては細く、そして長い。何より、西日を焼結したような紅縁の眼鏡が、銘に若者の名を確信させた。

「篠座くん……だよね？」

「……だったら？」

「えっと、ワタシは……」

「赤星 銘。一年A組のクラス委員長。ただし、(仮)」

唇の端を少し上げ、篠座が晒った。最後の一言に明確な悪意を込めて。

銘は息を呑んだ。初対面に等しい男性から、これほどはつきりと敵意を向けられたのは、初めてだった。

「あ……ご、ごめんね」

わけもなく謝り、思わず目を逸らす。

篠座の姿は、広い机を三つ挟んだ先にある。それでも威圧感に压倒され、視線を合わせられない。留年生とはいえ、さしたる年の差もない同級生に。どんな人生を送れば、こんな空気を纏えるというのか。それともこれは、奇妙に現実離れた黄昏の図書室の魔法な

のか。

外した視線の先に大きな鏡を見つけ、銘はまじまじと自分を見た。威厳も何もない、ちっぽけな少女がそこにいた。少し怯えた表情に、握った筭が痛々しい

しまった、と思った。

この格好、喧嘩を売りに来たも同然だ。篠座の冷やかな態度もそう考えれば無理もない。

銘は慌てて、鏡の横に筭を立てかけた。今更ではあるがやらないよりました。赤面の隠れる時間帯なのが、せめてもの救いだっただ。

出足からつまづいた交渉を挽回すべく、銘は会話のとは口を探した。篠座のそばの机には、数冊の本が広げられている。どれも分厚く、児童書のようなだった。

その内の一冊に、銘は見覚えがあった。

赤銅色の表紙に、緑と緋の文字で記された本文。

『はてしない物語』 著者は、ミヒヤエル・エンデ。

日本では「ネバーエンディングストーリー」として、二十年ほど前に映画がヒットした。銘もテレビ放映された映画から原作を読んだ口だ。『ファンタジーエン』と呼ばれる世界を救うため、本の中に呼ばれる主人公に、何度胸を躍らせ、憧れたものか。

『ナルニア国物語』『これは王国の鍵』……見れば、机上の書物はどれもファンタジーばかりだ。

「篠座くん……ファンタジー、好きなの？」

疑問の素朴さ故か、威圧感を忘れて、銘は尋ねた。

篠座は一瞥を返し、つぶやいた。

「飽き飽きだね」

「……えっ？」

予想外の返答に、銘は目を丸くした。

「飽き飽き……なのに、読み返してるの？」

「おまえには関係ない。それより何故、ここに来た？」

口調にかすかな苛立ちを感じ、銘は詮索の手を引いた。今は本題

を優先すべきだ。篠座から水を向けた好機を逃すわけにはいかない。

「掃除当番……篠座くん、ずっとやってないでしょ？」

「ああ、そうだったかな」

「どうして？」

「必要性を感じない」

寸毫も悪びれた様子のない篠座に、銘は語気を強めた。

「そんなの、おかしいよ。そりゃあ誰だって掃除したくないけど、みんな、仕方なくやってるんじゃない。篠座くんがサボってるから他の男子も真似して、真面目なコが困ってるんだよ？」

「奴隷の理屈だな」

「……ドレイ？」

目を白黒させる銘に、篠座の眼鏡が輝きを増す。

「自分だけ損を蒙るのが癪だから、他人を巻き込む　取り繕ったところでただの感情論だ。掃除が嫌ならしななければいいし、したければすればいい。義務でもない当番に、オレが縛られる謂れはない」

「掃除当番は義務でしょ？」

「ほう　根拠は？」

予想外の切り返しを受け、少女は言葉に詰まった。

「こ……校則……とか……」

「第何条、第何項？」

「え、えーと……」

「繚乱高校校則、風紀規定第三条第二項。『校内清掃は自主性を育むべく、生徒に一任する』　嘘はいけないな、委員長（仮）」

常識のように校則をそらんじ、篠座は蛇の眼差して銘を見た。

「自主性と当番制は相反する理念だ。いつから掃除が当番制になったか知らないが、校則に則れば現行の状態こそ違法になる。つまりは生徒の誰も、掃除を強制されるいわれはない。当番を強制したいなら、まず校則を改正して制度化するよう、生徒議会に具申することだな」

舌を抜かれたように、銘は言葉を失った。

篠座の言い分が詭弁であろうことは銘にだってわかる。だが、反論する頭の回転も、弁舌の冴えもない自分に、何が出来るというのか。

何より悔しいのは、篠座が明らかに遊んでいることだった。

言い訳すら本気でない。言葉を弄し、間抜けな訪問者をからかうのが主眼なのだ。危ない噂が真実かどうかはまだ判らないが、銘は確信した。この男の底意地の悪さだけは、掛け値なしに本物だ！

「だ……だけど……」

それでも、銘は引き下がらない。

知恵も魅力もない自分にできる、唯一のこと。

あきらめない。怖がらない。前に進む。

「……篠座くんの言ってるコトは正しいかもしれない。でも、困ってる人がいるのも本当なの……。無理強いはできないけど、お願い……助けると思って……」

「フン　結局は泣き落としか」

搾り出すような銘の訴えにも、男の答えはにべもなかった。

「生憎、オレはフェミニストじゃない。ボランティアにも興味はない。それとも何か？　掃除当番を引き受けてオレにメリットがあるか？」

「……ある」

「ほう。言ってみる」

「クラスのみなどと、仲良くなれる」

一瞬、あっけに取られた様子の篠座が、次いで乾いた笑いを漏らした

「クッククク……なるほどな。おかしな噂のある留年生が、年下の同級生に馴染めず、孤立している　それが、委員長サマのお見立てというわけだ。さしずめ、同病相哀れむところか」

「……えっ？」

「おいおい、いくら無能でも、少しは自覚があるだろう」

歩き出す篠座。机を避け、前へ。口に酷薄な笑みを貼り付けたま

ま。影が動く。銘との距離が詰まる。

「教室にいらなくても噂は聞こえてくる　馬鹿な新入生の噂だ。席が最前列というだけで選ばれた臨時の委員長職で有頂天になり、クラスの揉め事解決を買って出るも空振りばかり。当人はくそ真面目なだけに誰も強くは言えず、余計に性質が悪い。本音では皆、馬鹿の友人の秀才に期待しているのだが、秀才は友人に気兼ねし、推薦を辞退するという。業を煮やした周囲は、役不足を自覚させるべく、面倒ごとを次々と回すが、馬鹿は張り切るばかり。自覚はおるか、影で秀才がフォローしている事実ですら気付かない」

胸に突き刺さる刃の音を、銘は聞いた。

「そして最後の姦計　学校一の危険人物と目される男に、馬鹿をけし掛けた。噂が真実であり、ともに戻って来ないことを期待して。あまつさえ馬鹿は一人でやってくる。身の程知らずな秀才への対抗意識を抱えて、自分が使い走りに過ぎない自覚もなく、がんばればいつか認めてもらえる、まさに馬鹿のように信じて　だ」  
床を見詰める銘の視界に、男の靴が現れる。

「そんなおまえに同情されるとはな……クククツ、実に傑作だ。おかげですいぶんと暇が潰せた。情報はその礼だと思っただな。

わかったら、帰れ。オレの領域に二度と立ち入るな。おまえが何をどうがんばろうと、あのクラスで認められることはないし、ここでの努力は全て徒労に終わる。　あきらめろ」

最後の宣告は、意外にも情の音色を伴って響いた。

「……篠座くん……も……」

顔を伏せたまま、つぶやくように銘が言った。

「篠座くんも……あきらめたの？」

「あきらめる以前に、望んでいない。オレは一人で生きてきたし、これからも生きていく。それがおまえとオレの根本的な違いだ」

「そんなこと……ないよ」

ぐいと目をこすり、銘は顔を上げた。

太陽のような笑顔が、そこにあった。

「何だと？」

「だって、篠座くんは図書室（じゆ）にいるもの。本当に一人がいいなら、学校に残る必要なんてないでしょ？」

若者の薄笑いが、日に照らされた霞のように消えた。

「おまえに何が」

「うん、知らない。ワタシ馬鹿だから」

あっさりと認め、篠座を見つめる少女。

「でも、最初に篠座くんを見た時、思ったの。この人はここで、誰かを待ってるんじゃないかって」

攻守は、いつしか逆転する。

「多分ね……ワタシもそうだから」

若者の眉間に、深い皺（しわ）を刻んで。

銘の横を抜け、篠座は廊下に出る扉へと向かう。

立ち去るため ではなかった。ドアノブが音を立て、施錠を告げる。

「よほど、オレをお仲間（な）にしたいらしいが」

振り向いた篠座の放つ、これまでと異質の気配に銘は戦慄した。

改めて思い出される数々の恐ろしい噂。そうでなくとも密室に男女二人という状況に、ようやくにして思い当たる。

その隙を、篠座は見逃さなかった。旋風のように回りこみ、入り口付近の壁際に銘を追い詰める。

「助けのない場所で同じ台詞が言えるか、確かめてやる」

銘の退路を断つべく伸ばされる、男の両腕。

悲鳴は声にならず、武器は手元（てもと）にない。幕 入り口の壁に立て

かけたそれを探す銘の双眸が、不意に見開かれた。

篠座の背後、数メートルの壁に、有り得ざる現象が具現化していた。赤く染まる壁に浮き上がったのは、青色の光で描かれた幾重もの円と星型の図形、そこに配置された謎の文字。耳朵をくすぐる高音。

それが魔方阵と呼ばれるものと、銘は気がついた。しかし、何故？

直径にして二メートルはあろうそれが、壁から放たれたのは次の瞬間だった。垂直に屹立したまま、前触れもなく。

篠座を、背中から飲み込むように。

「危ないっ！」

銘は、反射的に手を伸ばしていた。

自分を狙い、迫っていた男の手を掴むと、全力で引っ張る。

一瞬、篠座が自分の手を握り返すのが感じられた。

そして何故か、自分の手が、逆に引っ張られたのも。

「……あれ？」

刹那、魔方陣の青色光が、視界を蹂躪した。

痛みも、感触も、匂いもなく。

篠座と銘は、魔方陣に飲み込まれ 図書室から消滅した。

## 第四話 異世界へ

緑の王国は、色褪せた死の只中に、孤立していた。

かつて、産着のように世界を包んだ草木そくもくの陰は、今や創世樹を中心とする小さな円ではない。境界線は一目で見取れる。外周を一步出た荒野に、緑は芽の一つとて残されていない。飛蝗しやうも鼻白む、それは一片の容赦もない篡奪さんだつだった。

今しも、その輪はじわりと縮み、緑を守る者の首を絞めていく。戦いは処刑の呈をなし、篡奪者は悦に入る。

圧倒的な軍勢で包囲したまま、王国の周縁を次第に齧りつついていく。子供が、焼き菓子縁をそうするように。

だが、緑もまた、座して滅びを待つものではなかった。

もはや干上がりかけた樹海に、凜とそびえる一基の塔がある。

深緑の塔 創世樹に比肩する自然界の象徴に、最後の希望は託された。

最上階の吹き抜けから、眩い光が溢れたのは、払暁はつせうのことだ。

今、深緑の塔は、再び、朝ぼらけの空気にまどろんでいる。

知るは、天駆ける風ばかり。

そこに現れた、この世ならぬ救いを。

『勇者』と呼ばれる人種を。

どこか懐かしい、涼やかな音色が聞こえる。

銘は、ぼんやりと目を開けた。

見上げた先に、円く切り抜かれた青空がある。目に鮮やかな蒼穹ではない。透度の高い、遠慮がちな青さだ。

朝だな、と思った。多分、起きるには少し早い時刻の。

再び目を閉じ、二度寝に浸りかけた銘を邪魔したのは、背中の訴

える違和感だった。布団でも畳でもない、あまり身に覚えのない感覚。堅く平たい、例えるならば板間のような

「……あれ？」

銘はもう一度、目を開けた。

相変わらず、綺麗な丸空がそこにある。吹き抜けなのだ、と気がついた。井戸の底から見上げたような光景だが、規模はまるで違う。三階程度の高さがありながら、こちらの空は十分に広い。天蓋は一切なく、吹き抜けの外周は円の形を保ったまま、乳白色の壁となつて、まっすぐ、銘の横たわる床まで伸びていた。

「……あれ？ あれっ？」

寝耳に水の異常事態に、銘はようやく気付いた。

「ここって、どこ？」

つぶやいてみたが、答える声はない。

銘は立ち上がった。周囲を見回し、改めて啞然とした。

部屋と呼ぶのを躊躇うほどに広い空間だった。壁と床は同じ材質で、継ぎ目の一つもない。その建材からだろうか、空気には凜とした芳香があった。無意識に背筋を伸ばしたくなるような雰囲気は、寺社や茶室を髣髴ほっふつとさせる。予備知識の欠片もない銘にも、ここが何らかの神聖な場所であるうことは想像できた。

だが、それにしても、この惨状は何だろうか。

部屋の中央に立つ銘の周囲には、無数の木像が散乱していた。

全て等身大の像である。人を模かたどったものだが、普通の人間像は一つとしてなく、どれも神像、或いは怪物めいた造形だ。あるものは八本の腕を持ち、あるものは触覚と翅を備えている。手にした得物も様々で、木製の剣や槍、或いは楽器のように珍妙な武器などもある。同じ像は二つとなく、精緻を尽くした出来栄のみ共通していたが、惨状はそれ故のものだった。床に散らばるは腕、指、髪、頭の破片。倒壊し、細部を欠いた木像はがらくたに成り果て、どこか恨めしそくに銘を取り囲んでいる。

ふと思いつき、銘は壁を見上げた。

上層には壁をくり貫いた洞が無数にあり、同様の木像が、それぞれ収められている。予想通り、洞の半分はもぬけの空だった。あの高さから落下したなら、手足を欠く有様も納得がいく。

「うわー、ラッキーだったかも、ワタシ」

枕元に転がっていた一抱えもある頭部を思い出し、銘は肝を冷やした。幸運と呼ぶには抵抗があるが、最悪よりは遙かにました。怪我はなく、意識もはつきりしている。不幸中の幸いとは、こういう時に使う言葉に違いない。

しかし、この現状がまるで理解不能なのは変わらなかった。

其の一。何故、ここにいるのか？

其の二。そもそも、ここは何処なのか？

頬を用いる古典的手法を試すまでもなく、夢ではない。

「……うん。まずは落ち着こう」

心なし鼓動を早める胸に手を当て、銘は目を閉じた。

「赤星 銘。十五歳。一年C組。誕生日は一月十一日」

耳に水が入った要領で頭を叩く。記憶は問題なさそうだ。

「あれ？ ワタシ、制服のまま？」

ブレザーにチェックのスカートという己の身なりに気が付いた。

これは意外だった。空が明るいせいか、家で寝ていた気でいたのだ。

同時に、新たな疑問が浮かんだ。今は何時なのだろう？

銘はポケットを探り、携帯を取り出した。

アンテナは圏外。そして時刻は 十七時四十七分。

「えええ……ええええ……っ？」

思わず、デジタルと頭上の空を見比べる。この時刻は有り得ない。それとも、有り得ないのは空の方か？

日付は四月の平日、第三金曜日。記憶の食い違いはない。いつもなら放課後の時間だ。雑用がなければ、夕暮れの中を彩子と帰路についているくらいの

「……思い出した！」

図書室の留年生。夕暮れの赤、魔方陣の青。

この場所にいるのが、魔方陣に触れたせいだとしたら。

「篠座くん……篠座くん！」

謎解きを忘れ、銘は若者の姿を探した。傍に倒れた神像の陰を、下敷きになってはしないかと、その下を。

けれど、見当たらない。名前を呼べども返事はない。

「そんな……」

銘は肩を落とした。小さな手のひらを広げ、見つめた。篠座の手の感触が甦った。唇を噛んだ。

かすかな音色を聞いたのは、その時だった。

「……この音……風鈴……？」

どこか懐かしいその響きは、銘に夏の風物詩を連想させる。

けれど、窓も風もないこの部屋のどこで、風鈴が鳴るのか。

瀕死の吐息のように絶え絶えの音を求め、銘は耳を澄ませた。残骸の谷間を抜け、音の源を訪ね歩く。もしや篠座ではないかとかすかに期待しながら。

けれど銘が見つけたのは、皮肉屋の若者ではなく、黒衣の少女だった。

少女は、木像の陰に力なく伏せていた。黒いワンピースの長い裾が、熱帯魚の尾ひれのように広がっている。無数のレースに飾られたそれは、明らかに少女の脚より長い。耳飾りは黒曜石のようで、全身黒尽くめだった。

「大丈夫!？」

少女の蒼白な顔を見て、慌てて助け起こす。

黒衣との対比もあってか、その肌の白さは抜きん出ていた。安否を気づかないながらも、銘は内心、舌を巻いた。細い首、華奢な肩、伏せた睫。唇は血の気を失っているが、これほどの美少女を間近にしたのは初めてだ。彩子も美人だが、この少女の美しさは別格だった。白雪姫を見つけた王子は、さしずめこんな気分だったのだろう。腕を回した背中 of 冷たさに一瞬ぞっとしたが、少女は弱々しく目を開いた。黒い鏡のような瞳に、自分の顔が映るのを銘は見た。

安堵した半面、どう声をかけたものか迷う。「もう大丈夫だよ」とはちよつと言えない。そもそも銘自身、大丈夫な状況とは言い難い。

「……………ゆ……………」

悩む銘を見上げる、少女の口が動いた。

「……………勇者……………さま……………《叢の国》<sup>サミリア</sup>をお救いください……………」

「ほえ？」

思わず、間抜けな声が出てしまった。

「……………ほ……………え……………？」

「い、いや、今は気にしないで！ ゆ、勇者？ 今、勇者って言った？」

真顔で問い返す少女に、顔をぶんぶん振って否定すると、銘は今一度、

その言葉を問う。少女は小さな顎を頷かせた。

「……………私は……………《奏の民》<sup>カナテ</sup>の巫女、リーイン……………。滅びを待つ我が国を救っていただくべく……………この世ならぬ場所より……………勇者さまをお呼びするのが……………私の……………」

鈴を振るような説明の言葉に、銘は動転した。

この理解不能な現状は何なのか。

いや、非常にわかりやすい状況ではある。魔方陣、見知らぬ部屋。異世界の巫女、『勇者』。どれも既視感たっぷり<sup>キワトク</sup>の単語だ。少女の説明を待たずとも、続きが想像出来る程度には。

「……………もしかして、魔王を倒してほしい、とか？」

「彼の者は……………『吸精主』と名乗っております……………」

「あ、やっぱり」

「もはや……………頼れるのは貴女だけ……………どうか……………どうか……………」

「ワタシ、だけ……………」

銘は、全身が総毛立つのを感じた。

こんな、漫画のような出来事があるのだろうか？ 信じ難い気持ちも確かにある。だが、夢なら夢でいい。目を覚ませば現実に戻る

のだから。今はこの、夢にも見たことのない立場を信じていいのではないか。

何より、少女の黒い瞳は懇願していた。

救いを求める手に応ずるのに、夢も現実も関係ない　少なくとも、銘はそうだ。

「……わかった。何が出来るかわからないけど、協力してあげる」

「ああ……勇者さま……！」

頷いた銘に、リーインが嘆息した。瞳に涙さえ浮かべている。

その時、塔が揺れた。

「地震……？」

微震の続く中、銘は少女を抱き寄せた。ただの地震でないことはすぐにわかった。壁を伝わり聞こえる地鳴りのような音が、下から上へ移動していくのが感じられたからだ。そう、まるで、何かが外壁を這い登るように。

「な、何か、マズいかも……逃げよ、リーイン。ね、立てる？」

手を取り、支えるようにして少女を促す。立ちあがりかけた少女は、不意に顔をしかめ、崩れ落ちた。

「……駄目です……脚が……」

見れば、倒れた木像にスカートの端が挟まれている。引き裾で気付かなかったが、脚も木像の下だとすれば大事だ。

「ちよつとガマンして……せーのっ！」

少女の脇に手を入れ引つ張るが、脚は縫い止めたように動かない。今度は木像を動かそうとするが、こちらはそれ以上の難物だった。切り株でさえ一人で運ぶのは苦勞する。非力な少女の腕力で等身大の木像に挑むのは無謀に過ぎた。微動だにしない。転がすことさえ出来ない。

部屋は今や、嵐の海を渡る船のようだった。揺れは満足に歩くことさえ許さず、窓なき壁越しには雷鳴のような怪音が轟く。

「……勇者さま……お逃げください。私のことは、もう……」

「そんなこと、出来るわけないよっ！」

思わず叫ぶ銘。その声に応じたように、揺れが止まった。  
「うそ……」

静まり返った空を見上げた銘は、愕然とした。  
吹き抜けの外から覗き込んだ、巨大な虫の頭がそこにあった。鍬<sup>クワ</sup>形虫<sup>カタムシ</sup>のような雄雄しい顎の向こうに、感情のない複眼が据えられている。ダンプほどもあるのではないか　そう思われた。

その大顎が無造作に振られ、壁を叩いた。

塔が激しく揺れ、壁の木像が弾き飛ばされた。少女の手に余る重量の木像が、軽々と宙を舞った。破片の雨とともに降り注いだ。

「　危ないっ！」

咄嗟にリーインに覆い被さりながら、銘は絶望していた。自分の体がたいした盾になるわけがない。けれど、他に方法はなかった。目を閉じ、身を固め、終わりの時を待った。

「……勇者さま……」

耳元に囁く声に、「違う」と言いたかった。

何を調子に乗っていたのだろう。自分が勇者なわけがない。

何も……何一つも、成し遂げたことがなくせに。

「　人違いもそれくらいにしてやれ」

頭上でつぶやかれた、皮肉めいた声。

次の瞬間、音の洪水が鼓膜を襲った。重量という暴力が、部屋を殴り

つけるのが聞こえた。音もまた暴力だった。

けれど、破片の一つとして、背中に触れるものはない。

永遠に続くかと思われた木像の豪雨は、ほどなく途切れた。

銘は、恐る恐る顔を上げた。

天を狙うかの如く長い棒を構えた、若い男の背中がそこにあった。振り返る横顔に走る、赤い眼鏡縁<sup>フレーム</sup>。

「篠座くん……！」

「　そいつは召喚に巻き込まれた、ただの『脇役』だ」

破顔する銘を無視し、篠座は無事だった巫女に語りかけた。

「シノザ……？ まさか……貴方は、あの……」

「『召喚系』 それ以上の説明は不要だ。間違っても、『ゆ』で始まる呼び名は使っんじゃない」

有無を言わせぬ命令口調に驚き、押し黙る巫女。

「ちよ、ちよっと！ そんな言い方しなくていいでしょ！」

「うるさい奴だな」

思わず抗議する銘を一瞥すると、篠座は険しさを増した木像の谷から進み出た。

威嚇するように大顎を噛み合わせる怪物を見上げ、冷やかに笑った。

「この俺を召喚した以上、覚悟しておけ。『一分一秒でも早く世界を救う』それが俺の流儀だ。邪魔する奴に容赦はしない」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6625/>

---

召喚系！

2010年10月13日11時30分発行